

「旅にでも出るとすつか」がクロッチの口癖でした。猫は狭い縄張りから1歩も出ないまま生涯を終えるものですが、まれに「旅」に出るオス猫がおりました。そしてそのほとんどが「戻らぬ旅」であったのです。

チャモトラは雄々しく義理堅いボス猫でした。ある日、流れ者の猫との一騎打ちに敗れ、静かに町を去っていったのです。1年ぶりにチャモトラが姿を現した時、界限の猫たちは騒然となりましたが、額から^{まぶた}に壯絶な戦いの名残をとどめた老猫が向かったのは、とある古びたアパートの玄関口でした。一家の驚きと歓びの声に迎えられ、供された山盛りの猫缶を一気にたいらげた老猫は、懐かしそうに見守る家族一人ひとりの顔をしばし見つめた後、そのまま暗闇に姿を消しました。「死期を悟ったノラがお礼参りに帰ってきた」と人々は噂をしました。その一家は向かい

わあっ」と挑発的な声をはりあげたのです。

そのころ、全身の毛を逆立てて部屋にとびこんできたミケが口を血だらけにしているのを見た母と娘は、大家さんの怒声を聞いてあわてて窓辺にかけよりました。向かいの板塀の上で背中を丸めた黒猫がうなり声をあげています。毎日のようにアパートのひさしの上によつてきては昼寝をし、ちよくちよく家猫のジョヴァンニのおやつを失敬していく猫です。真下ではすさまじい形相の大家さんが庭ボウキを振りかざしていました。

クロッチが向かいの窓を見やると、すかした弱猫^{よわねこ}ジョヴァンニと飼い主の少女とその母親がこちらを心配そうに見ていました。「さてと、どうすつか。このまま松の木のでつぺんまでかけ登るか、それとも隣の庭に飛び降りようか」などと思案していたクロッチは、塀

クロッチ物語

再会の花の奇蹟

ふたたび会う日まで

に住む大家さんに気がねしつつも、ノラ猫たちに食べ物を与え、事故や病で行き倒れたものたちを手厚く葬っていたのです。

金木犀の甘い香りに酔いながら、チャモトラの毅然とした後ろ姿に想いをはせていたクロッチは、昼下がりののどかな空気を引き裂く微かな悲鳴をとらえて塀の上から身を乗り出しました。見れば、口から血をしたたらせた三毛猫のミ

の先に停めてあった軽トラックのエンジン音に気がつきました。一瞬ためらった後、クロッチは塀の上からトラックの荷台へと大きくジャンプをしたのです。「ええいつ、ままよ」。クロッチのおなかをボウキの先がかすったまさにその瞬間、トラックはガタガタと車体をゆらして発進しました。荷台に無事着地したクロッチと窓辺のジョヴァンニの視線が刹那、交差しました。

「これでよかった こうでもしなけりゃ、あの人たちは自分とこのミケがフェレットを襲ったって正直に言っちゃまうからな」。そうです、界限のノラ猫たちは今日まであの家族にどれほど助けられてきたことでしょうか。あの家族の立場が、そしてまもなく母になるミケの境遇が悪くなるようなことは絶対にあつてはならないのです。「そう、このままオイラがいなくなりゃ万事がうまく収まるのさ」。

作かりにゃん

ケが、かの一家に住むアパートにかけ込んだところでした。塀から飛び降りたクロッチはミズヒキの陰で体を丸める小さな動物を見つけたのです。大家さんの老夫婦が飼いはじめたばかりのフェレットでした。怖いもの知らずのヤンチャ坊主がミケにちよつかいでも出したのでしよう。身重のミケが無我夢中で手加減のない反撃に出たことは一目瞭然でした。実は夏の終わりに足を怪我したノラ猫のミ

天涯孤独、しょせん、生まれた時も死ぬ時もすってんてんのノラのみです。「オイラ、やっと旅に出れたってことさ」。

ドミネコ通りを抜けてつきあたりの大通りに左折したその時、トラックは道に大きく張り出した枝

ケは、一家に保護され介抱を受けた後そのまま居着いた格好になっていたのです。

大家さん夫婦が、かわいいペットに大怪我を負わせたミケの処分を、さもなければ一家の転居を追ってくるのは間違いありません。クロッチは何を思ったかいきなり手負いのフェレットをそっと口にくわえました。そして垣根をくぐりぬけて庭いじりをしていた大家さん夫婦の前に躍り出たのです。老妻が悲鳴をあげ、老夫は「野郎っ！」と怒鳴りました。「目つきが悪い」とつね日ごろから毛嫌いしていた黒猫が、わが家のベットの襲撃者と思ひ込み、クロッチにかみかかっています。

間髪をいれずにフェレットを地面に下ろして塀に飛び上がったクロッチに、老夫は手にした庭ボウキを振りあげました。「降りてこいドラ猫め、とつかまえてやる！」すると、怒りくるう男性に向かつてクロッチは「ほわほわほ

をかすめました。頭上でたくさん真つ赤な実が揺れています。それを見たたん、クロッチはうれしそうに目を輝かせたのです。「いつかまた会える、みんなと」

サネカズラの花言葉は「再会」です。

